

横井孝・久下裕利 編 『考えるシリーズⅡ 知の挑発①』

王朝文学の古筆切を考える―残欠の映発―

加藤 昌嘉

私が依頼されたのは、『考えるシリーズⅡ 知の挑発①』

王朝文学の古筆切を考える―残欠の映発―の書評なのですけれども、本書の目玉は、『夜の寝覚』散佚部分の発見でしょうから、その後の展開も含め、この問題について検討してみたいと思います。

【a】横井孝「『夜の寝覚』末尾欠巻部断簡の出現―伝後光厳院筆物語切の正体―」（本書所収）

【β】大槻福子＋久保木秀夫＋中川照将＋仁平道明＋横井孝＋横溝博「座談会 夜の寝覚」（『武蔵野文学』二〇一四年増刊春号）

【γ】池田和臣「伝後光厳天皇筆 夜の寝覚末尾欠巻部―寝覚の上は二度死に返る―」（『古筆資料の発掘と研究―残簡集録 散りぬるを―』青簡舎、二〇一四年

九月）

【δ】横井孝「『夜の寝覚』末尾欠巻部復元の問題点―新出断簡分析の方法を模索して―」（『実践国文学』第八六号、二〇一四年一〇月）

『夜の寝覚』の中間と末尾に大きな欠損があることは、よく知られています。

本書所収の横井論稿【a】は、実践女子大学蔵・伝後光厳院筆の古筆切が、『夜の寝覚』の末尾の欠損部分だと断定できる、と報告しています。その古筆切には、「しらすりしやまちの月をひとりみてよになき身や思ひいつらん」という和歌が記載されており、その和歌は、『拾遺百番歌合』『風葉和歌集』『夜寝覚抜書』に載る『夜の寝覚』の和歌と、ピタリと一致するからです。

平安文学研究史上ベスト3に入ると言ってもよい大発見です。このニュースは、『朝日新聞』二〇一四年六月三日夕刊でも、「平安後期『夜の寝覚』末尾部分か」という見出しで取り挙げられました。池田論稿【ア】も、これを承けた「付記」を載せています。

さて、問題はここからです。この古筆切と、同じ料紙・同じ寸法・同じ筆跡の古筆切が、ほかにも存在するのです。横井論稿【a】では、実践女子大学蔵の古筆切のほかに、同種の古筆切が一枚あると報告されています。その後、さらに四枚も見出され（摸写を含む）、横井論稿【δ】では、計一六枚、計一四三行、計二五五〇字になった、と報告されています。

『夜の寝覚』末尾欠損部だと断定できる古筆切が一枚あり、それと同じ料紙・同じ寸法・同じ筆跡の古筆切（摸写を含む）が一五枚ある。可能性は二つに絞られるでしょう。

◎可能性A…一六枚の古筆切はすべて『夜の寝覚』の欠損部分である。

◎可能性B…一五枚の古筆切の中には他の物語が含まれているかもしれない。

後者のような疑念を持つのは当然です。一人の書写者が、同じ形態で、複数の歌集や物語を書写するケースがあるからです。本書所収の大槻論稿も、これら古筆切すべてを『夜

の寝覚』と断定することに懐疑的です。座談会【B】でも、この問題が議論されています。

では、いったい、どうしたら、可能性Aを、もつと強力に言挙げできるでしょうか。私が考える手続きは以下の二つです。

一つめは、一五枚の古筆切が、ほかの作品ではないことを証明すればよい。諸氏は、まだ、この調査を完了していないようですが、一五枚の古筆切が、現存するどの物語ともどの仮名日記とも合致しないと断言できれば、すべてを『夜の寝覚』だと主張しやすくなるでしょう。

ただし、厄介なのは、いわゆる中世王朝物語の類、お伽草子の類を調査しなければならない点です。ほとんど、索引がないのです。しかし、手を拱いている暇はありません。一五枚の古筆切が、『我身にたどる姫君』でも『いはでしのぶ』でも『むぐら』でも『雫ににごる』でも『雨やどり』でも『しぐれ』でもない、と断言できる日を心待ちにしています。

もし、二五枚の古筆切が、現存するどの物語とも合致しないと断言できるなら、もはや、一五枚の古筆切の中に、今は伝存しない物語が混じっているとか、一五枚の古筆切の中に、現存する物語のうちの散佚部分が混じっていると考える必要はなくなるでしょう。なぜなら、

二〇世紀までに散佚する物語だけが、二種類以上、同時に書写され、かつ、古筆切として残る。などという可能性は、ゼロに近いでしょうから。

二つめは、鎌倉時代の物語の古筆切の中で、同じ料紙・同じ寸法・同じ筆跡のものは、どういう状態にあるかを調査すればよい。

たしかに、座談会【β】では、春日切という、異なる私家集を同時期に書写した写本群の古筆切について述べられていて、可能性Bを否定しきれません。

しかし、物語に限った場合はどうでしょうか。例えば『狭衣物語』では、同じ料紙・同じ寸法・同じ筆跡と認定できる一連の古筆切があり（須藤圭『狭衣物語 受容の研究』、および、本書所収の須藤論稿を参照）、他の物語は混じっていません。しかも、一つの巻に偏っているのです。

つまり、一人の書写者が、複数の物語を、同一形態の写本群に仕立てる。という例は、鎌倉時代には見当らない（江戸時代にはあるが）と思うのですが、いかがでしょうか。右の二つの手続きが踏まれたら、私は、一六枚の古筆切はすべて『夜の寝覚』の欠損部分だ。という前提で研究を進めたいと思います。そのとき欲しい資料は、これです。

★その古筆切一六枚の、実物大の、カラー写真集（および翻刻）。

これは、横井氏か武蔵野書院にお願いすれば叶うでしょうか。

当該の古筆切のほかにも、『夜の寝覚』末尾の欠損部分は残存しています。伝慈円筆の古筆切二葉、『国宝寝覚物語絵巻』詞書、『夜寝覚抜書』です。これらをどのように並べ、どのように解読するかは、各研究者に委ねられます。写真が皆に公開されていれば、ほかの研究者も大学院生も、公平に、研究に参加できます。

今回の発見によって、『夜の寝覚』欠損部のストーリーを復元する、という研究は、一気に進むでしょう。座談会【β】を見ますと、諸氏が、「こういうストーリーだったろう」「こういうストーリーだったはずがない」という意見を出していて、もう既に、錯綜気味です。想像を逞しくする復元研究を「暴走」と評する向きもあります。

しかし、最初は、それでよいのではないのでしょうか。例えば、恐竜の復元研究においても、かつては、恐竜Xの足の骨を恐竜Yの頭にくっつけたりしていたそうです。資料の写真が皆に公開されているなら、各自が復元案を呈示し合い議論することは、研究の初期段階として、意味のあるステップとなるに違いありません。

* * *

では、以下、本書『考えるシリーズⅡ 知の挑発①』王

朝文学の古筆切を考える―残欠の映発』の各論を紹介したいと思います。

第I部『寝覚』『巢守』の古筆切には、以下の四論文と座談会記録が載ります。

■横井孝「『夜の寝覚』末尾欠巻部断簡の出現―伝後光厳院筆物語切の正体―」

■久下裕利「挑発する『寝覚』『巢守』の古筆資料―絡み合う物語―」

■大槻福子「『夜の寝覚』末尾欠巻部分と伝後光厳院筆切」

■栗山元子「『夜の寝覚』・『巢守』の古筆切をめぐる研究史」

■池田和臣＋加藤昌嘉＋久下裕利＋久保木秀夫＋小島孝之＋横井孝「座談会王朝物語の古筆切」

横井論稿・大槻論稿については、既に触れました。栗山論稿は、『夜の寝覚』欠損部の研究史を整理したもの。また、『源氏物語』宇治十帖の続篇「巢守」の研究史も整理しています。良きガイドです。

久下論稿は、その「巢守」が、菅原孝標女の作品であると説くもの。『夜の寝覚』『浜松中納言物語』『朝倉』『みづからくゆる』のみならず、「巢守」も、孝標女の作であり、共通するモチーフ・通底するテーマがあると主張しています。

座談会は、かつて『武蔵野文学』（二〇一〇年増刊夏号）に載ったものの再録。『源氏物語』の続篇たる「巢守」の古筆切をめぐる討論です。私も参加しています。六人の話は、たった二枚の古筆切から、物語はどのように作られ享受されたか、という大きな問題に向かっていて、示唆に富む討議録になっています。

第II部『物語の古筆切』には、以下の五論文が載ります。

■佐々木孝浩「定家本源氏物語本文研究のために―四半本古筆切の検討―」

■田坂憲二「伝聖護院道増筆断簡考―新出賢木巻断簡の紹介から、道増の用字法に及ぶ―」

■中葉芳子「伝西行筆源氏集切の意義―鎌倉時代における『源氏物語』享受の一端として―」

■池田和臣「『源氏人々の心くらべ』『源氏物あらそひ』の祖型の断簡―『源氏物語』評論の初期資料発掘―」

■須藤圭「狭衣物語のからみあう異文―古筆切を横断する―」

佐々木論稿は、鎌倉時代の『源氏物語』古筆切を取り上げ、本文を検討するもの。大島本『源氏物語』の本文は、いわゆる『青表紙本』の中で孤立することがあるが、鎌倉時代の古筆切の中には、大島本の独自異文や朱点と一致することがあると説いています。

田坂論稿は、非常に独特な筆跡の、道増筆と言われる『源氏物語』古筆切を扱ったもの。同じく伝道増筆の『伊勢物語』などにも触れ、その用字法を分析しています。

中葉論稿は、『源氏物語』の中の和歌を集めた『源氏歌集』を検討したもの。歌集と呼ぶべき形式／梗概本と呼ぶべき形式について考察しています。

池田論稿は、『源氏人々の心くらべ』や『源氏物あらそひ』の原型と見られる評論書を紹介したもの。その古筆切は、鎌倉時代前半のものと測定されています。

『源氏歌集』にせよ、『源氏人物論』にせよ、『古筆切の存在』によって初めて、鎌倉時代初頭に既に行っていた享受方法があったと知られるわけです。

須藤論稿は、『狭衣物語』の複数の古筆切を検討したもの。現存写本の僚卷（ツレ）とおぼしき古筆切や、これまでの系統論を補完し得る古筆切が紹介されていて、『狭衣物語』諸本論に寄与するでしょう。

第三部「和歌の古筆切」には、以下の三論文が載ります。

■田中登「冷泉家本と古筆切」

■久保木秀夫「『古今集』高野切の伝来と由来」

■浅田徹「藤原通俊の統新撰について——伝足利義尚筆後拾遺集断簡の紹介——」

田中論稿は、冷泉家にあった写本が切り出された諸例を

挙げています。これまで知られていた古筆切が、もとは冷泉家所蔵本（あるいは、定家手沢本）であったと判明したわけです。同様の例がまだほかにもあるのではないかと期待されます。

久保木論稿は、高野切と呼ばれる『古今和歌集』について再検証したもの。どの段階まで揃っていたか、いつ切断されたか、なぜ高野切と呼ぶのか等が検討されています。

浅田論稿は、今は伝存せぬ「統新撰」という秀歌選について考察したもの。『後拾遺和歌集』写本の和歌に合点が付いていて、それが「統新撰」所収歌であることを示す点だと言えれば、「統新撰」がどういうものだったか復元できると説き、それを試みています。

* * *

本書は「古筆切」に的を絞った論文集ですが、二〇一四年にもなつてまだこんないろいろな「新発見」があるのか、と驚かされました。一方で、『うつほ物語』や『源氏物語』や『狭衣物語』や『枕草子』は、写本（完本）も多く残っていて、欠損部もないのに、なぜか、研究が進んでいないなあ、と悲しくなりました。『源氏物語』や『狭衣物語』の古筆切ばかりが精査され、完全に残る写本の分析が疎かになっているとしたら、本末転倒と言わなければなりません。

最後に、横井氏と武蔵野書院に、リクエストをしたいと

思います。前掲の「座談会 夜の寢覚」 β と、横井論稿 δ を、次の論集に再録していただけないでしょうか。この二つが単行本に収録されぬまま埋もれてしまうのは、もったいない。そしてその際、一六枚の古筆切の写真を、実物大で（無理なら、すべてを同じ縮尺率にして）掲載していただけたら、これほど貴重な資料集は、ほかにありませんまい。

二〇一四年五月刊 A5 324頁

10,000円（本体）武蔵野書院

（かとう まさよし・法政大学教授）